



2011・10

SORA 39号

月光

柴田 佐知子

逆さまに虫籠掴む虫の貌

風入れて部屋青くなる盆の入り

泣く前の子の眼動かず草の花

見てゐたる露にしばらく籠りけり

母のこと聞かれてばかり地藏盆

みのこづち腹の立つほど付いてゐる

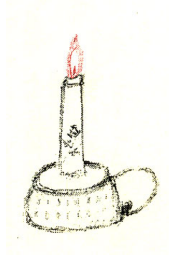
黍の穂や辺境に血の征服史

月光のとどく限りをこの世とも

耳遠き父を遥かに山笠やま走る

—「俳句研究」秋の号より—

三伏や怒濤に勝る蜃の声



山割つて男出てくる日の盛り
秋めくや通路といふは素気なし
海鳴りにまみるる棚田刈りにけり
大花野起伏の伏はすでに闇
墓石が返す山の日鷲渡る
父寄せて敷布を替ふる秋の昼
南無三宝撫で肩の墓穴に入る
秋風や一の社は焼けしまま
落人の逃れきつたる紅葉谷
鍋釜も化けて出さうな月夜かな
解かれたる案山子即ち棒二本
星月夜支へて父を起たしむる